HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	有岡勇教授について
Citation	北海道大學教育學部紀要, 27, 203-205
Issue Date	1976-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29147
Type	departmental bulletin paper
File Information	27_P203-205.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

有岡勇教授について

有岡教授，宮崎教授の停年退官を記念して「教育学部紀要退官記念号」が編集されるにあたり，私が有岡教授の紹介という大任に指名され，随分と躊躇した。一般には後任の教授がその任にあたる慣わしのようであるが，5年間に4名の教授をお送りするという教室の窮状から蛮勇を振い決意した

有岡先生は昭和7年，札幌師範学校専攻科を卒業後，礼文島，札幌市等において初等教育に従事されておりましたが，昭和19年，招かれて北海道帝国大学予科助教授兼学生主事補として本学に就任されて以来,31年の長きにわたり,予科生，新制大学になってからは，主として教養部学生の教育に御尽力されてきました。

予科時代には正課体育以外にも，特に水泳，スケートには専門的立場から，一般的負担を越えて個々の学生と直接人間的な触れ合いの中に指導されたことが伝えられています。学内の多くの教官の中にも，当時の先生の御指導を受けられた方も多く，先日も会議で同席した他学部教官も懐かしんでおられました。

昭和24年，新制大学発足と同時に，北海道大学助教授として発令になり，教養部運営委員として市川・坂本・安保・明峰その他の諸先生方と共に，発足時の教養部の授業計画に参画され,今日の教養部授業運営の基礎づくりに，大きく貢献をなされました。

昭和26年には,教育学部体育専攻課程の設置にともない,北海道大学教育学部助教授として発令になり,体育専攻課程の基本計画の確立,更らにはその運営に大きく貢献をされました。特に，寒冷地における体育研究者，体育指導者の育成に情熱をささげられました。

教養部においては，施設委員，教務委員，学生委員等を数度にわたって勤められ，教育施設の充実，教育課程の改訂等に手腕を発揮されました。特に近年，学生の大学や教官に対する不信が次第に高まった，所謂，北大紛争の時期には学生部委員として活躍，あの荒れ狂った学生の中に入り，例の良くすき透る声と簡明卒直な話し振りで学生と対応され，とり巻いていた学生が，鳴りを静めて耳をかたむけていたことが思い出されます。先生は記憶が非常に正確であり，保健体育科では勿論，教養部内でも生き辞引き的役割を果たされ，教官会議等においても，教務関係，学生指導関係，更らには，発足当時のことにいたるまで適確に説明されることはたびたびでした。

北海道大学の輝かしい伝統と制度機構の中に，体育が正しく位置づけられ，その進むべき方向へと操舵されてきたことは，有岡先生の全くてらいのない質実剛健の風格からにじみ出た，陰の力は甚大であったと思われます。

昭和46年7月，教授に昇任，48年には初代奈良岡所長の後を受けて,「体育指導センター所長」を勤めると同時に，一般教育にかかわる複雑で雑多な問題の処理を迫られる激職の教養部教務委員長を引き受け，文字通り大奮闘をなされ，文系改善カリキュラムの実施に大きな足跡を残されました。

しかし，これらの激務のなか，48年度後期から次第に高血圧が嵩じ，遂に49年度には授業担当不可の診断が下されるほど悪化してしまいました。そして49年10月からの休職のまま退官されたことは誠に残念至極と申しあげるほかありません。今後は1日も早く，御健康を回復されて，研究・指導に御活躍されますようお祈りしたい。

先生の研究は，戦前・戦後を通じて北海道という積雪，寒冷地帯における体育指導に徹しておら

れれました。個人研究では，スケート競技の普及，発展のための研究を進められ，また，先に退官された奈良岡先生，宮崎先生等との共同研究においては，スキー・スケート選手の体力測定，指導法等ががあります。

なかでも，ライフワークともいうべき，スケートの「地上特設リンク作りに関する研究」は，現在のスケート競技の普及・発展・更らには,オリンピックをはじめ,各種国際競技会の札幌開催が実現されたことからも高く評価されています。

昭和15年の冬季オリンピック競技の札幌開催が決定され，その数年前より，北海道氷上連盟，札幌スケート協会では，メンバーを一新（有岡先生は当時から連盟役員として活躍）し，その準備をしつつあった。当時，世界的には，パイピングのリングは実用化されていたが，これは小規模な屋内リンクであって，オリンピック主会場である。スピードスケート・コースは自然氷を利用するか，地上特設の氷盤上で行うか以外には考えられなかった。その準備として，昭和13年に全日本氷上競技選手権大会を，札幌中島公園現野球場に特設した地上リングで行った。全国的にこのような大きな地上リング作りは初めてのことであり，参考文献も無く，当時，有岡先生初め，関係者一同，暗中模索でこの仕事にかかったという。連日，氷点下10度前後の寒空に，夜通しホースを握り，氷作りに努力された結果，懸念された障碍もなく，この大会は大成功をとげ，オリンピックは，この方式で完遂出来る自信を得たという。しかし，大陸にぼっ発した戦いの波は，日々に拡大して，ついにはオリンピック返上の止むなきにいたり，先生初め関係者一同の努力も水泡と化し，断腸の思いで見送られたという。

戦後，スケート競技の普及をはかるため，それまで自然氷（池）利用のリンク作りから，地上特設リンク作りの研究に重点を移され，北大構内に小規模なリンクを作り，地上特設リンクの研究を進められた。特に，降雪の多少，寒気の度合い，使用期間の長短等についての研究が繰返えされた。

これらの成果をもとに，市関係者を動かし,昭和25年以来,札幌市教委も中島公園野球場，円山陸上競技場にも 400 mのコースのとれるリンクを特設している。

昭和29年には，日本では勿論，アジアとしても初めての世界選手権競技男子スピードスケート大会を，円山陸上競技場の地上特設リンクにおいて開催，その成果が，1972 年のオリンピック冬季大会の札幌開催の芽となったであろうことは，日本スポーツ界の斎しく認めるところであろう。

現在では,パイピング・リンクの普及により，日本各地で実用化されており，オリンピック札幌大会のリンク作りも，何の不安もなく，大成功裡に大会を終了し得たわけだが，連盟役員として，第一線を退かれた有岡先生にとって，過去の苦労を重ねて研究を続けたリンク作りを思い，感慨無量のこであったろう。

有岡先生は研究・教育のかたわら，園芸，旅行，写真等多くの趣味を持っておられる。なかでも先生の写真技術は，単なる余技としてばかりでなく研究面でも貴重な存在であった。各種測定の同時記録撮影等に積極的に参加してくださり，協力を惜しまなかった。特に，数年前，節電図をブラウン管を通うし，連続撮影装置で記録した時などは，写真技術の全く無知な私に，撮影技術は勿論のこと現像・焼付け，その薬品の調合にいたるまで懇切丁寧に指導してくださったことが思い出されます。これらの技術を完全マスターせぬままにお送りすることは，全く残念なことです。

先生の写真技術は，技術そのもので，『高価なカメラで，良い写真を撮るのは誰にでもできるもの，私は，安いカメラで，いかに良い写真を撮るかに苦労しているよ。』とさりげなく云った先生の言葉に，先生の写真に対する態度というのがうかがわれる。

有岡勇教授について

有岡先生は，明治44年12月１日，北見管内津別町において農業を営まれていた有岡繁次様の三男として生まれた。先生が小学校２年生のときに，子息の教育の為に離農し，札幌山鼻地区に移住された。親父様の意志を受けた兄弟は，教師・医師等に，立派に大成されている。早くに御母堂様を病気で失われた兄弟は，あげて御親父様の長寿を願い，医学面，食生活面，体力面等,それぞれを担当，特に，有岡先生は，専門的立場から，早朝のラジオ体操，朝夕の散歩等のお世話をされていた，その甲斐あり，御親父様は，92才の高齢にいたるまで，健康そのものであったが，今夏の高温続きから病床に伏され，現在は，先生をはじめ，多くの兄弟が日夜交代で看病にあたっているという。先生の厳しい生活の中でのやさしい一面がうかがわれる。先生ともども１日もはやい健康のご回復をお祈りしたい。

最後に，有岡先生の御健康と御自愛をお祈りし，併せて，後輩の為に，時折御力添えくださるようお願いしつつ筆をおきます。

昭和50年11月　　吉　田　敏　雄